マイ・ストーリー
吉田功二郎

●●●●
よしだ　こうじろう

ぼくはこんな人

ぼくは人見知りをするタイプです。でも、人によってぼくに対する印象は違うと思います。ある人は、ぼくのことをおとなしいと思うかもしれませんが、別の人はよくしゃべるやつだと思うのではないでしょうか。自分でも二面性があると思います。時と場合に応じて、積極的にも消極的にもなります。何も考えていないように思われたりするのですが、実は何か言ったあとで、「どうしよう」と思い悩んだりすることもあります。

まちなかよりいなかのほうが好きなように、人工的なものよりは自然のほうが好きです。

おいたち

■小さいころ

ぼくは、1981年に長崎県※3長崎市で生まれました。生まれたばかりのころは、ミルクをたくさん飲んでいたそうです。生まれてしばらくすると体重が少し減るのがふつうなのですが、ぼくは逆に体重が増えました。医者から「生活能力がある子だね」と言われたそうです。よく眠り、おとなしくて手のかからない赤ん坊だったようです。

幼稚園のころは、おとなしく、口数の少ない子でした。家の周りは自然が多かったので、幼稚園のころから、虫かごと網を持って山に行って昆虫を捕っていました。昆虫図鑑がぼろぼろになるまで見るほど昆虫好きでした。

■小学生のころ

小学3年生のとき、父の転勤で兵庫県※1姫路市※2に引っ越すことになりました。ぼくにとって、これは大事件でした。姫路と長崎では、文化というと大げさすぎますが、違うところがたくさんあります。まず、ことばが全然違うし、住んでいる人の性格も違うように感じました。それから、環境も違いました。長崎では、家の周りがみかん畑で、学校から帰ると、1人で昆虫を捕まえに行ったりしていました。ところが、姫路では、公園はあっても外で遊ぶ子どもは少なく、だれかの家に集まってテレビゲームで遊ぶのがふつうでした。

環境やことばの違いに、ぼくはすっかりとまどってしまいました。新しい環境になかなかなじめず孤独感を味わうこともありました。

そして、転校してきた年の10月、遠足に行ったとき、かなり高い遊具から落ちて、左腕を骨折して入院しました。2、3週間入院したことがきっかけとなって、「保健室登校」をするようになりました。つまり、学校には行くのですが、教室ではなく、保健室でずっと過ごしていたのです。そのと

きは、保健室の先生がいろいろと話を聞いてくれました。でも、4年生になると、その保健室の先生が他校に移ってしまい、保健室に行くこともなくなりました。そして、家に閉じこもるようになりました。そんなぼくを両親は心配して、海や川へ釣りに連れていったりしてくれました。夏休みなどには、長めの旅行にもよく出かけました。冬には信州に行って、初めてスキーも経験しました。

このころ、ぼくの身近にいて、なぐさめてくれたのはペットでした。そのころ家にいたのは、亀1匹と猫2匹、そして犬1匹です。ちなみに、現在は、亀が4匹、猫が3匹、犬が2匹、それから小鳥が4羽います。動物のほか、植物にも興味があって、いろいろな植物の名前を覚えました。今でも、植物を見たり育てたりするのが好きで、ときどき園芸店などに寄って、鉢植えなどを買います。

■中学生のころ

中学校に進学してから、クラスメイトの顔ぶれは変わりましたが、学校を休みがちで、周囲になじめない点は変わりませんでした。家族との関係もあまりよくありませんでした。両親や兄、妹と口をほとんどきくこともなく、食事は1日に一度とるだけでした。1日の大半を、家にある本を読んで過ごしました。だれとも顔をあわせたくなくて、部屋から出ませんでした。ペットにも接しませんでした。

このころ、「いい高校に行って、大学に進んで、安定した企業のサラリーマンになる」ことを両親が期待していることになんとなく気づいていました。両親が思いえがいているような道から、はずれてしまった自分の苦しい気持ちをわかってほしいと思っていました。でも、そのことを両親には言いませんでした。言ってもしかたがないと思っていたからです。「なるようになれ」というすてばちな気持ちもありました。しかし、その一方で、毎日学校に通う「ふつうの生活」がしたいという思いが少しずつ強くなっていました。

そんなとき、転機が訪れました。3年生の10月、久しぶりに登校したある日のことです。英語の授業で、先生が県内の私立高校3校を紹介してくれました。そのひとつが市川高校でした。姫路では、私立高校は公立高校に落ちた人が行くところだというイメージを抱いている人もいます。でも、先生の説明を聞いて、私立高校には公立高校にないよさもあるかもしれないと思いました。それに、出席日数が少ないぼくにとって、内申書※4が重視される公立高校は不利でした。市川高校には推薦※5制度というのがあって、推薦の枠に入れば、内申書がよくなくても入れることを知りました。このことを知ったときは、うれしかった。これが、ぼくに与えられた最後のチャンスかもしれないと思いました。すぐに担任の先生に、「推薦で市川高校を受験したい」と相談しました。ぼくの希望を理解してくれた担任の先生は、条件を出しました。それは、「明日からきちんと登校する」ということでした。突然登校するようになったぼくに対して、「がんばれよ」と声をかけてくれるクラスメイトもいました。担任の先生の応援もあって、ぼくは「やるしかない」という気持ちで、必死で学校に行き、塾にも通いました。そして、無事合格しました。両親も、ぼくが自分で選んだ高校

に合格したことを心から喜んでくれました。

高校生活

■市川高校へ

市川高校に入って、悪いイメージをもたれないように、ぼくは努めて明るくふるまいました。それまでの経験から、「なめられちゃだめだ」という思いがあったからです。そして、弓道部に入り、多くの友人ができました。また、自分で目標を決めて、その目標に向かってがんばることのおもしろさもわかってきました。たとえば、2ヵ月後に漢字検定試験をうけるという目標をつくり、がんばる。がんばった結果、合格する。次にまた違う目標をつくる。初めて自分の力で学校生活をきりひらいているという実感がもてました。

そして、いろいろな道があることを知りました。市川高校の卒業生の進路はさまざまです。就職する人もいれば、専門学校※6に行く人もいるし、大学に行く人もいる。両親が思いえがいている道だけではないことを知ったのです。ぼくの視野は広がりました。そして、前向きになりました。現在まで、無遅刻、無欠席です。

■弓道部

同じ中学校出身の同級生から誘われたので、弓道部に入部しました。ぼく自身、もともと弓道に興味もありました。3年生から部長をつとめています。放課後、2時間ぐらい練習します。現在、初段です。

弓道は、スポーツ系と文科系の中間に位置するような武道だと思います。弓道は、矢を的に当てるかどうかだけではなく、入場してから退場するまでの作法も大切です。ちょっと堅苦しいと思うときもありますが、作法は必要なことだろうと思います。ぼくは弓を引くときがいちばん好きです。そのときは何も考えていません。その無の状態が好きなのです。

弓道を続けることで、忍耐力や持続力を得ることができました。それまでぼくは何かひとつのことを最後までやりとおすことが苦手だったのですが、弓道を3年間続けられたこと、さらに部長としてみんなをまとめてこられたことは、大きな自信につながりました。「自分にもできるんだ」という自信は、将来の目標にもつながっていきました。それまで、ぼんやりと考えていた「獣医」という目標が明確なものになったのです。

■市川高校について

当初、市川高校にはあまりいいイメージはもっていませんでした。しかし、その半面、市川高校が「ふつうの生活」ができるチャンスをぼくに与えてくれるだろうという期待もありました。市川高校には勉強にうちこむ人、部活に励む人、趣味に没頭する人など、とにかく、いろいろな個性をもった人たちがいます。そういった人たちがぼくの固定的な考えを改めてくれました。

ぼくは、市川高校に入学して、努力することの楽しさを覚えたり、弓道部の部長をつとめたり、以前のぼくには考えられない生活を送っています。ぼくにとって、いわば人生のスタートラインとなった学校なので、恩人のように感じています。

将来について

小さいころから、「獣医」という仕事はとても身近なものでした。ペットをたくさん飼っていたので、ペットを病院に連れていくことも多く、「獣医」に自然と興味をもつようになりました。そして、テレビや新聞などで、ペットだけではなく、家畜や野生動物を診ることも獣医の仕事であることを知り、野生動物を保護するという仕事に大きな魅力を感じるようになりました。

自然界に生息している多くの野生動物は、本来なら人の手を借りずに生きていけるはずなのに、今では自分たちの能力だけでは生きていけない状況にあると思います。たとえば、鉛玉を飲みこんでしまった鳥は、自分ではどうすることもできません。人間のせいで傷ついた動物は、人間しか助けることができません。このような野生動物を助けてやりたいと思っています。

以前、飼っていた猫が捕ってきた鳥を世話したことが何度かあります。傷ついて飛べなくなった鳥が、ぼくの手当てで元気になり、手元から飛んでいく姿を見て、何とも言えない充実感を覚えました。獣医になって、もっとたくさんの動物を元気にすることができれば、本当に幸せだと思います。

家族・友だち

■ぼくの家族

両親、2つ上の兄、2つ下の妹、ぼくの5人家族です。ぼくの家族はみんなで集まってワイワイとにぎやかに騒ぐことはあまりありません。どちらかと言えば、静かです。でも、ぼくにとって、家族はいつも近くにいるのがあたりまえの存在です。もしいなくなったら、「ぼくはどこに帰ればいいの？」と途方にくれるのではないかと思います。中学生のときは、両親とあまり話をすることはありませんでしたが、ぼくが市川高校に進学したいと言ったとき母は心から喜んでくれました。そんな母の姿を見て、ぼくもうれしかったことを覚えています。父は仕事に忙しく、ぼくら子どもたちには無関心だと思っていました。でも、最近、進路の話をするようになって、そうではなかったことを知りました。それもやはりうれしかったことです。

母とはよく話をします。母も動物や植物が好きなので、話がよくあうのです。ぼくは、基本的にだれにも相談しないで、何ごとも1人で考えて決めます。でも、決めていても、母に相談するように話をします。たとえば、英語の検定試験をうけることを決めているときも、「英語の検定試験、うけようかなあ」というように母に話すのです。母は、ぼくがすでに決めていることを知ってか知らずか、「いいんじゃない」と賛成してくれます。ぼくの気持ちを尊重してくれているのだと思います。

高校2年生のとき、母に「わたしたちは、『いい学校に入って、いい会社に就職する』のが幸せだと思っていたのよ」とうちあけられました。「ぼくの感じていたとおりだったんだ」と思いましたが、そのときは、獣医になるという目標をもっていたので、いやな感じはしませんでした。むしろ、親が子どもに期待するのは当然なことで、何も期待されな

かったら寂しいことです。親に期待されるのは、むしろ幸せなことだと思うようになっていました。

■ぼくの友だち

ぼくにとって、友人は気がねなしにつきあえる存在です。落ちこんでいるときに、悩みを聞いてもらうのではなく、いっしょに騒いだりしているうちに悩みを忘れることができる、そういう存在です。ぼくは人をよくからかいます。だから、気がねなくからかうことができる人、つまりよけいな気をつかわずに意思の疎通ができるかできないかが、友人としてつきあえるかどうかのポイントだと思います。

ぼくのまち

■今住んでいるまち、姫路市

姫路と言えば、世界遺産にも指定されている姫路城※7は圧巻だと思います。今住んでいる「城見台」はその名のとおり、城の見える台地で、夜になるとライトアップされた姫路城がうかんで見えます。本当にきれいな景観です。市の中心部に出ると、ごみごみしていて少し苦手です。どちらかというと、にぎやかなまちなかはあまり好きではありません。姫路城周辺は年中、地元の人はもちろん国内外から人々が訪れます。姫路城を中心にいつも活気にあふれているまち、それが姫路だと思います。

■生まれたまち、長崎市

幼いころ住んでいた長崎は理屈ぬきで何から何まで好きです。今でも、テレビなどで長崎のまちなみが紹介されているのを目にすると、すぐにでも行きたくなります。でも、それは過去のいいおもいでがあるからで、あくまで過去は過去だと思っています。過去をときどきなつかしむのはいいけれど、今が何より大切です。これは、市川高校で自分の居場所をきちんときずけたから言えることだと思います。